# 遠い国からの殺人者

笹倉明

# 遠い国からの殺人者

笹倉　明

文藝春秋

**著者紹介**

一九四八年十一月兵庫県に生まれる。早稲田大学文学部文芸科卒業後、広告代理店勤務、フリーの雑誌記者等を経て、執筆生活に入る。「海を越えた者たち」で第四回すばる文学賞佳作。一九八八年、「漂流裁判」で第六回サントリーミステリー大賞を受賞する。上記同名著書の外に、「東京難民事件」、「アムステルダム娼館街」がある。


遠い国からの殺人者

一九八九年四月二十日　第一刷
一九八九年八月二十日　第三刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　笹倉明
発行者　豊田健次
発行所　株式会社　文藝春秋
郵便番号一〇二
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷
製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します


©Sasakura Akira 1989 Printed in Japan ISBN4-16-310900-5

# 遠い国からの殺人者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# プロローグ

いやな風が吹く季節になったわ。

劇場を出て街を歩きだした渚は、心の中でそんなつぶやきをこぼした。薄手のコートを羽織るようになってまだいくらも経たない秋の暮れ――、身体のどこかに空いた隙間をぬって沁みわたるような風が吹く。博多湾から、そのむこうの玄界灘から、那珂川にそって吹き上げてくる。今年もあっという間に暮れていくんだと、わびしいような思いにひたりながら、足はいつもの店に向いた。

「おばさん、お酒ね。いつもの」

裸電球に照らされて、六十の坂を越えた女将（おかみ）が一人、言葉すくなに座っている。五人も入れば満席になる、戸や窓が格子に組まれた障子紙貼りの風流なつくりの店である。

中洲川端にあるそこへは毎日のように、といっても十日足らずの間だったが、楽屋に寝泊りする仲間の踊り子を連れて飲みにきていた。博多に来ると、渚にはそれがひとつの楽しみなのだ。仲間といってもほとんどが年下で、おねえさんと呼んで慕ってくれる娘（こ）にかぎられる。その日は、誰もが次の出演地を目ざして散っていくために、ゆっくりできる子は少ない。なかでも親しくつき合ったホワイト・レディは、明日からは鹿児島。三回目の出番を十一時にすませると、夜行列

車〝かいもん〟に乗るために駅へ急いだ。
「明日から、またしばらくお別れね」
と、お酒を差し出した女将に渚はいった。
「お次は、どっちのほうへ行きんしゃっとね」
「名古屋よ。朝一番の飛行機で」
だから今夜は楽屋ではなく、空港ちかくのビジネス・ホテルに泊ることになっている。
「それはご苦労なこったいねえ」
女将は、眼差しに思いやりをこめて、「気いつけて行きんしゃい」
いつものおっとりとした声音でいう。
「旅には馴れてるつもりだけど、何だか、このごろは億劫でね」
渚は、息をついて手酌した。冷たい地酒〝白花〟が疲れた身体にじわりとひろがっていく。
いつまで踊っていられるだろう。
四十八歳という年齢を意識して、彼女は独り思う。
ひと月余り前、長崎の劇場ではじめてのキャンセルを食らった。容色の衰えはいつのまにか身体ぜんたいにゆき渡ってしまったようだ。厚化粧で覆いかくそうとしても隠しきれるものではなく、男たちの視線に野次が混じることがある。意地悪な客のなかには、開脚(オープン)ショーにわざと視線をそらす者もいる。屈辱を味わってまで踊っていたくはないけれど、ひとり息子の貴広はまだ小学生だ。子供の世話をしてくれている母親の面倒も見なければならない。
店の女将は、母親と歳格好が同じであった。髪に白いものが目立ち、穏やかな丸顔に刻まれた皺は人生のながい混み入った航跡を感じさせる。女将には、三年前にはじめて来たときから踊り

子の境遇を話せた。北海道の炭鉱町に生まれ、落盤事故で父親が生き埋めになったのが十八のとき――、以来、手にした補償金も借金の返済に消えて路頭に迷った母親と、まだ小中学生の弟妹を支えていかねばならなかった。若い娘にできることといえば限られていた。裸踊りがいちばん稼ぎになる、と大人から知恵を授けられ、まだ男性(おとこ)も知らない身で札幌へ出た。ドサ回りの芸人を多く抱えたプロダクションに所属し、〝あい渚〟と名づけられ、キャバレーのフロア・ショーで初舞台を踏んだのが十九の終りころ。たいして恥ずかしいとも感じず、先輩の踊り子に教えられた振付(ふりつけ)どおりに身体をうごかすのが精一杯だった。それから、すでに三十年ちかく踊ってきたことになる。

いろんなことがあった。本当に、いろんなことが……。

渚は、思いにふけった。このごろ、お酒が入るとすぐに昔のことになる、と苦笑しながら、いくつかの男性遍歴を辿ってみる。男には苦労をさせられたと、つくづく思う。貴広が生まれて間もなく、相手の男は認知もせずに去っていった。東京にいる現在の彼にしても、旅に出ている間は何をやっているのやら。達也、と呼び捨てにする年下だけに、あまりうるさくいうのもはしたない。あんな男でも、いないよりはマシ。別れる元気もなく、さすらいより定着を求めつつある。これこそ歳をとった証拠。やはり、踊り子としての限界が近づいているのだろう。

渚は、そんなことを考えて、小さく頭を振った。肘を張り、肩をいからせて猪口(ちょこ)を重ねる。胸の底からやりきれなさがこみ上げて、知らずと涙が滲んでいた。

「おにいさん、ちょっと見せてね」

そういって照明室へ上ってきたのは、ラモーナ・カンナだった。

綿谷四郎は、右手にピン・スポットを握ったまま軽くうなずいた。
新宿スター劇場の舞台と照明室は目と鼻の先である。たったいま舞台袖から飛び出して最初の一曲を踊りはじめたマリー・レイの表情は手にとるようにわかるし、少し大きな声を出せば言葉を交せるほどだ。
マリーの振付は、ひと頃よりずっとよくなっている。軽快なポップスにのせて巧みにステップを踏み、笑みをふりまき、レースに縁どられた深紅のドレスをひるがえして素早いターンをくり返す。若さにあふれた踊りだった。本舞台から客席へ向って突き出した花道にやって来ると、照明室とはいよいよ近くなる。
「じゃ、行くからね」
と、四角形にくり抜かれた照明室の窓から、ラモーナが声を張り上げる。「しっかり踊るんだよ」
「はあい。おねえさんも気をつけて——」
マリーが列車でも見送るように手を振り、小造りの顔を泣き笑いのようにゆがめる。と不意に、ステップを乱してバランスを崩した。
「ほらほら、しっかり踊って」
笑いを飛ばしながらラモーナは叫び、可愛い子だよ、と独りごちた。
こんどいつ会えるかわからない。半年先かもしれないし、二年後かもしれない。どこかの劇場で偶然顔を合わせて再会を喜びあうまで、それぞれ一人の旅をする。そのことが楽日の別れを少なからず感傷的なものにしているのだった。
「カンナちゃんは、明日からはどこだっけ」

綿谷は、本舞台へ去ったマリーへピン・スポットを絞りながら尋ねた。
「楽屋に幽霊が出ることで有名なところよ」
埼玉県の山奥にぽつんとあるS劇場だった。階段を上っていると、後から足首をギュッとつかまれて身動きがとれなくなったという踊り子もいる。過去に一度、楽屋泊りの踊り子が火事で焼け死んだことがあり、そのせいだというのがもっぱらの噂だ。
「行きたくないよ、あんなところ。ひと頃はこっちからキャンセルしてやったもんだけどね」
「昔は、踊り子が劇場を選んでいた」
「そう。そんな時代がなつかしくなっちゃ、おしまいだね」
ラモーナは、じゃ、また会うよ、と綿谷の肩をそっと叩いて背中を向けた。
真白なツーピースに身をつつんだ彼女は、三十をとうに過ぎたとはいえ、まだ充分なまぶしさを留めていた。踊りも華麗でダイナミックだ。新宿スター劇場の所属なので、三ヶ月に一度は戻ってくる。そして、十日間、一日おおむね三回、踊り子の少ない週は四回の舞台をつとめて、また旅立っていくのだ。
綿谷は、彼女に好意を抱いていた。どうにもならない恋だ。他の水商売の戒律（おきて）と同じく、照明係が踊り子といい仲になるわけにはいかない。
東北の雪深い町から出稼ぎ人に混って上京して十余年、やがて三十三歳になる。コメディアンを志し、漫才師の付人（つきびと）をしたり劇団に所属したりして成功を夢見てきたが、甘くはなかった。いまの仕事にしても、女の裸が見たくてはじめたわけではない。投光が主な仕事だが、たまには舞台に立ち、幕間に寸劇（コント）で笑いを提供できることが頑固な夢の一角を支えていた。
マリー・レイの踊りが終り、二曲目に入った。春風をテーマにしたピアノ・ソロだ。いったん

退いて、淡いブルーのスリップ姿で再登場したマリーは、花道の先端にある丸舞台に寝そべった。壁のボタンを押すと、それが十センチほどの外枠を残してゆっくりと回りはじめる。周囲から視線を集めて性行為の演技をはじめたマリーへ、場内スポットの赤とブルーと紫を選んで投光する。照明係の仕事は、そこで一段落だ。あとはラスト・ミュージックがかかるまで、客が踊り子に手を触れたりすることがないかどうか、見張っていればよかった。

マリーは、股間に赤いマニキュアの指を伸ばし、肩と頭を支えにして身を反らす。ながい黒髪が丸舞台の縁まで乱れ散り、起伏の豊かな色白の肌がライトを吸いこんで、いかにも妖しげな雰囲気をかもした。ピアノのクライマックスにあわせ、指を震わせてのぼりつめていく。やがて、ぐったりと全身の力を抜いた。いっとき静かに息をついてから身を起こす。

次は、彼女の得意芸だ。秘部をつかって煙草を吸ってみせたり、小さな玩具のラッパを鳴らして客を驚かす。そして最後は、軽快な歌謡曲と拍手にのせられて、右へ左へ脚を開きヒールを掲げてみせる。客と戯れあいながら三分余り、いかにも愉快げに照明係まで笑いの渦に巻きこんで過ごすと、マリーは退いた。

その後、時を移さずに飛び出した女へ最初のピン・スポットを投じた綿谷四郎は、なごりの笑いを消した。その舞台になるときまって、泡立つように起こる不快さのせいだ。マリーの舞台が天真爛漫といえるものであったから、よけいに心のうちが翳ったように感じたのかもしれない。

彫りは深いがほとんど無表情の、見事なプロポーションをした黒のアミ・タイツ姿。長い手脚をディスコ・ダンス風にうごかしながら、本舞台から花道へと進み、そして引き返す。はげしいロックにしてはおざなりの、単調な、むしろ気怠いような動きだ。

南米、コロンビアから来た女であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四分余りの曲が終った。女がいったん退いて、場内は暗転した。ひと頃は、そこで何人かの客が立ってジャンケンをはじめるのが常だった。勝ちをおさめた者が舞台に上り、再び現われた女と実際の性行為をやってみせる、いわば売買春を見せ物にするショーが行なわれたものである。新しい法の下で規制がきびしくなって以来、そういった露骨な光景は影をひそめているが、それは表向きの話だった。公然のものが密室へと舞台を移したにすぎず、異国からの踊り子の仕事の中身は少しも変るところがなかった。

やがて、女がネグリジェに着替えて再登場すると、綿谷四郎は気の重さを吐息で振り払い、スポットを点けた。

# 第一部

# 1

警視庁の通信指令本部へ、女の声で一一〇番通報があった午前十一時過ぎ、楠木克宏巡査部長は新宿署刑事課強行犯捜査係のデスクで、ある強盗事件の報告書をまとめて一息ついたところであった。

指示を受け、石波巡査とともに現場へ急行した。

西新宿六丁目×番×号所在のマンション〈コーポ・レインボー三〇二号室〉。

女からの通報の内容は、ただ、男の人が倒れている、というものだった。場所は地番まできちんと教えたけれど、言葉には奇妙なクセがあり、名前も告げずに切ってしまったという。

マンションの玄関ドアは開いていた。入ると、すぐ右手に管理人室がある。初老の男がガラス窓から顔をのぞかせ、刑事の話に目を見張った。デスクの引出しの中をひっかきまわして合鍵をつかみ、エレベーターで三階へ――。

黒い鉄製扉へのノックに、応答がなかった。即座に開けて踏みこむと、楠木部長刑事は直感的に死の匂いを感じとった。六畳程度のダイニングをざっと見て、次の間への襖を引く。

瞬間、管理人が短く叫んで棒立ちになった。ぎょろりと目を剝いたまま言葉もない。

男が、ベッドの脇に仰向けに転がっていた。投げ出された右腕の手指には、狩猟用らしい大きなナイフが握られている。すでに死後硬直が全身に及んでいるのだろう、肘を少し折り曲げた腕を取ってみると、針金でも通されたようにそのまま持ち上った。

「応援を頼む」

楠木部長刑事は、同行の石波巡査に命じた。

死体は、それほど無残な状態ではない。負傷部位は心臓付近であるらしく、長袖のアンダーシャツの胸部から脇腹にかけて、べっとりと赤黒い血糊が付着して畳にも血溜りをつくっている。その他の部分には、傷はなさそうだ。下はブリーフ一枚きりで、青白く、むくんだような肌が寒ざむしい。身長は、百七十センチ程度か。筋肉質の身体つき。南東向きのベランダ側を頭にし、ベッドにそって天井を見上げる形で、左の腕は半ばベッドの下へ潜っている。両の脚はやや開いて、わずかに膝の関節が折れ曲がり、これもまた固く硬直していた。わずかに歪みを帯びた面長の顔は、どこか拗ねた少年の表情を思わせる。ゆるんだ唇の隙間から、かるく舌を挟んだ黄色い歯並みが見えた。

「この人がわかりますか」

部長刑事が尋ねると、管理人はやっと我に返ったように、

「この部屋の借り主だす。いやあ、何と何と何と……」

つよい訛りのあるだみ声でいった。

「名前は」

「キヤマ・ヒロシさんだす。木の山に浩、サンズイに告げるという字だす」

楠木は、手帳にボールペンを走らせた。いずれ改めて事情聴取することになるが、とりあえず

問い続けた。

「同居人は――」

「契約に来たときはいませんですたが、入居して間もなくですたか、女が出入りをはじめたようですたな」

「どんな女性でしたかね」

「金髪だったす。ありゃ、まんず西洋の女ごだすべな」

「顔立ちのほうもあちらの？」

「んだす。大きな目をしてだす。美人だったすな。いやあ、それにすても、何と何と……」

木山浩が部屋を借りたのは、今年の冬、二月半ばのことであったという。部屋代は、管理費込みの十万八千円。契約時、身分は学生ということだったが、家賃は月々滞りなく振り込まれていた。このごろは贅沢な学生がいるもので、実際、親元はたいそうな実業家らしいと、管理人は興奮のままに喋り続けた。

楠木は、鋭い眼差しで部屋を眺めた。八畳の和室である。

壁際にセミダブルのベッド、部屋のほぼ中央に小さな四角いテーブル、その上にラジカセ一台ほか、煙草の灰が付着した空の灰皿、飲みさしのワインボトル、食卓塩。ベッドと反対側の壁際にスタンド式の細長い姿見。整理箪笥のようなものはなく、長さ一メートルほどのスチール製の洋服掛けが一つあるきりだ。ほかに、家具といえるものはない。部屋の隅に乱雑に積み重ねられた漫画や週刊誌の類。こげ茶色の布製ショルダー・バッグ。その他、若干の日用品があるにすぎない。

全身を映す姿見やピンクのベッド・シーツからして、管理人のいう女性の出入りは確かだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com